

2025年10月12日 主日礼拝メッセージ

聖書:ホセア書7章1~16節

説教:真実と偽り

はじめに

当たり前のことですが、人は自分以外のいろいろな人たちとかかわりを持ちながら生きています。そこには、やっていいことと悪いことがあって、子どものときから厳しく教え込まれます。盗んではいけない、嘘をついてはいけない、自分のことばかりではなくほかの人のこともちゃんと考えなさい。ところが、大きくなるとどうなるか。新聞やテレビでは、高い地位にある人が表ではいい顔をしながら、裏ではよくないことをしているようなニュースが報じられる。そんなことで良いのかと疑問を持ちながら、世の中は真実ばかりでは生きていけない、嘘だって必要なのだと開き直っているところもあります。

アブラハムの子孫であることを誇りにしていたイスラエルの人々も同じでした。聖書の神を信じるようにと徹底的に教えられてきたはずなのに、ホセアの時代になると本当の神を捨てバアルの神々を拝み、自分の欲しいものを手に入れるために偽りのことばで人が殺されていくような状態になっていました。その時神はどのようなことを語ったのかを見てまいります。

1 わたしが癒やすとき

1) 咎と悪があらわになる

1節の前半にこうあります。「わたしがイスラエルを癒やすとき、エフライムの咎、サマリアの悪はあらわになる。」エフライムとサマリア、いずれも北イスラエルの代表的な町の名前です。ここで、神がイスラエルを癒してくださるというのはよいのですが、その癒しが行われるときに、咎と悪があらわになる、と言っています。せっかく癒してくださるのなら、咎と悪は忘れてくれればいいのに、どうしてこんなことをするのか。初めてこれを聞く方は、困ってしまうのではないか。このことはまた最後に触れることにします。

2) この世の現実

そこでまず悪とか咎と呼ばれるものが、どんなときに現れるのか、その実例を挙げます。むかし、大学に行かずアルバイトに明け暮れていたときのことですが、地方の旅館に泊まりながら、道路や山の斜面に穴を掘って石の標識を埋めるという仕事をしていたことがありました。お役所が発注した

仕事ですので、最後に検定官と呼ばれる役人が来て図面どおりに石が埋められているかチェックすることになります。そこで何が行われたに驚いた。会社の人が「よろしくお願ひします」と言いながら、検定官に高価な洋酒を差し出すと、相手は表情を変えずにそれを受け取ったのです。よくある時代劇の悪代官そっくりでした。これは賄賂ですから全くの悪です。

2 偽り:罪

1) パンとかまど (主の目に悪を行った王たち)

検定官が多少手加減したからと言って人が死ぬわけではないかもしれません。そんなことでいちいち目くじら立てなくとも、と言う人もいるでしょう。しかしこの誤魔化しは、やがて大きな罪にふくらんでいきます。4節にこうあります。

「彼らはみな姦通する者。パンを焼くときの燃えるかまどのようだ。生地がこねられてから、ふくらむまでは、燃え立つことをやめている。」パンをつくるには、まず生地をこねてから、パン種、つまりイーストを入れてふくらませるためにしばらく寝かせておく必要があります。十分ふくらむまで、かまどには火がまだ入らない。「燃え立つことをやめている」と言っているのはそのことです。

これは何を言っているか。聖書でパン種は罪の象徴です。とても小さなものです、パン全体をふくらませる強い力がある。姦通する者たちは、夜の間にひそかに陰謀を企て、朝になると強い火で熱くなったかまどにこねたパンを入れて焼く。それはまるで罪がふくらんで大きな力になっていく様子に似ているといっているのです。

2) 外国に助けを求めるが、主を尋ね求めない

ここで彼らと言わわれているのは、北イスラエルの王たちのことです。列王記を見ると、この王たちのほとんどは「主の目に悪であることを行った」と書かれていて、バアルと呼ばれる五穀豊穣の神々を拝み、どんどん聖書の神を捨てた。信じる神を取り替えると何が起きるか。国の進むべき道筋に大きな影響を与えていく。具体的にはこうです。北イスラエルは小さな国に過ぎません。そこへ強い力を持ったアッシリアが北イスラエルを脅迫してくるという事件が起きた。武力ではとても勝てません。そこでどうしたか。主に伺いを立てるのでは

なく、自分たちの知恵によりたのみ、一計を案じた。國中から銀をかき集めてアッシリアの王に差し出した。

3) 剣に倒れる

それでどうなったか。アッシリアは北イスラエルと平和条約を結び、軍隊を引き上げていった。北イスラエルは、自分たちの知恵によって危機を乗り越えたと大喜びした。しかし主はこれをどのようにご覧になったか。11節に書かれています。「エフライムは愚かな鳩のようで、良識がない。エジプトを呼び求め、アッシリアに飛んで行く。」アッシリアに対しても、エジプトに対しても、何か困ったことがあるとすぐに飛んで行って助けを求める。神の目には、まるで愚かな鳩のように見えたというのです。

一滴も血を流さずに平和を取り戻したのだからよかったですのではないか、と言う方もおられるでしょう。問題は平和がいつまで続いたのかです。平和だったのはたった十数年間だけで、アッシリアは一方的に約束を破り、剣によって北イスラエルを滅ぼしてしまいました。だから主は、エフライムは愚かな鳩のようだと言った。

では、それまで北イスラエルはなにをしていたのでしょうか。いざというときのために備えをしたのか。いいえ。国のリーダーたちは平和だ、大丈夫だと言って浮かれながら自分たちのことだけを考え、陰謀を企て、偽りのことばで王を喜ばせていました。どうしてそんなことをするのか。14節の真ん中にこう書いてある。「穀物と新しいぶどう酒のためには群がって来る。」わかりやすく言えば利権です。お金、名声、権力、この世の富が手に入るならば、嘘であろうが偽りであろうが、なんでもやるということです。しかし、偽りのことばに築かれた繁栄は長く続かない。結局倒されてしまった。

3 真実：神

1) どちらを選ぶのか

ここに書かれているのは、今から2700年以上も前の古い時代の話です。しかしそく考えたら、いまも同じようなことを繰り返しているのではないか。北イスラエルと同じ道をこのまま進むのか、それとも主に立ち返るのか。私たちはこの二つのうちのどちらかを選ぶことになる。言い換れば、真実か偽りか。そのどちらかから選ぶ。真実には主が与えてくださるのちがあります。しかし、偽りには北イスラエルを見てわかるように滅

びしかない。あなたはどちらを選ぶか、と主は問い合わせています。

こう言うとある人たちは反発するでしょう。理想を言うのは簡単、でも現実は厳しい。食うか食われるか、そんな青臭いことを言っていたら敵にやられるだけだ。しかしこの意見には、一つだけ見落としていることがあります。世の中が厳しくて理想どおりにならないことは、そのとおりです。しかし自分自身はどうなのでしょうか。世の中がねじ曲がっているから、自分の生き方もねじ曲げてよいとはならない。主は、まず世の中をよくしなさいとは言っていない。まずあなた自身は主に立ち返るのかどうか、それともそのまま偽りの生き方をしながら誤魔化していくのか、ひとり一人の生き方を問いかけるところからはじめます。

主はそのことを北イスラエルの人々に問いかけました。でも、北イスラエルは穀物と新しいぶどう酒を求めるだけで、主は求めません。ところがアッシリアが攻めてきて穀物や新しいぶどう酒を失ってしまう。そのとき初めて気がついた。この世の財産、名声、権力、家族、これらのものが私を幸せにしてくれると信じ、たとえ嘘でも偽りがそこに混じっていても気にもしなかった。でもそれを失って、自分の幸福は偽りの上に築かれたものだったわかる。そうなってようやく、本当の土台はどこにあるのか、真理はどこにあるのかと探し始めるのです。

2) 罪を思い起こして主に立ち返る

そこで最初の疑問に戻ります。主である方が、私たちを贅いだしてくださるというときに、咎と悪とをあらわにされる。どうしてこのような言い方をするのかという疑問でした。二つのことが言える。一つ目。私たちの咎と悪はどのようにして表に出て来るのかです。穀物と新しいぶどう酒が一杯あるときはまったく思い出しません。ところがそれらをすべてなくしてしまうときがくる。具体的には挫折や失敗、家族を失ったとき、人に裏切られたとき、そんな思いがけないことに会って、自分は何かを間違っていたのだと気がつく。間違った生き方、聖書はそれを咎と悪でと言う。こうして咎と悪があらわになっていく。これが一つ目。

3) イエス・キリストが癒やしてくださる

二つ目。自分が間違っていたと知ることはつらいことです。しかし主はなんと言われるか。「わたしがイスラエルを癒やすとき。」もうだめだと叫んで真っ暗闇に突き落とされたと頭を抱えている

そのとき、実は主が私たちを癒してくださるのはちょうどそのタイミングなのです。いったいそのとき主はどこにおられるのでしょうか。私たちといつしょに暗闇の中に立っておられます。あなたの失敗、あなたの咎と惡、そのすべての罪をわたしが引き受けるから、安心して行きなさいと声をかけてくださいます。真理である主はこうしてくださる。だからあなたも真理であるイエス・キリストを選び取りなさいと言われます。

偽りのことばを叫ぶ人たちの声がますます大きくなり、そんなことばに喜んで耳を傾ける人たちが増えた時代に感じます。でもその先には滅びしかありません。私たちは静かでか細い声ですが、真理でありいのちである主のことばを選び取っていきたいと願います。